令和６年度学力検査問題

国　語

注意

1　監督者の開始の合図があるまで，この問題冊子を開かないでください。

2　問題は，１ページから10ページまであります。

3　解答は，全て解答用紙の所定の欄に記入してください。

4　解答用紙の※印の欄には，何も記入しないでください。

5　監督者の終了の合図で筆記用具を置き，解答面を下に向け，広げて机の上に置いてください。

6　解答用紙だけを提出し，問題冊子は持ち帰ってください。

一

(1)と(2)について答えよ。

(1) 次の【文章】を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。なお、本文中の……線は(2)の問一に関わるものである。

【文章】

鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を対象として捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのことが、人間、とりわけ若い皆さんが①世界と自分との間にズレを感じる理由だ。

重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。例えば、森を切り拓き、田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証しなのだが、見方を変えれば、その②自由に閉じこめられているともいえなくはない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、（孤独ではあるけれども）自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

しかし現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならない。世界の仕組みを理解して記述するには、数学がなければならない。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、X ジェット機が一機、空を飛べる。

そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星の運行から暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や狩猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが③第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学びきれない。人間は学ぶべきことを増やしすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。例えば、脳の「海馬」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深部で「新生ニューロン」という神経組織を生成している。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組む研究チームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々成果を競っているという。

たしかに、何をするにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かというと、現実はそうなっていない。実は新発見というものは、発見者が一五～一六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年になにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だというこ

とだ。若い力とは「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨肉化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用することで環境に適応し、生き残ってきたのだから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。④若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

（『何のために「学ぶ」のか〈中学生からの大学講義〉1』小林康夫「学ぶことの根拠」による。一部改変）

（注）メカニズム…仕組み。

問一　本文中の［X］に入る語句として最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

1　あいにく　　2　ようやく　　3　むしろ　　4　あらかじめ

問二　次の［　　］の中は、本文中の①世界と自分との間にズレを感じる理由についてまとめたものである。［ア］に入る内容を本文中から二十字で探し、初めの六字を抜き出して書け。

人間は、言葉を用いて世界を名づけ、［ア］から。

問三　本文中の②自由に閉じこめられている の説明として最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

1　学問が高度で複雑になり、知識量の強者と弱者が生まれ、世界が閉鎖的になるということ。
2　動物の一員として、人間も鳥や魚と同じように自然に支配される宿命にあるということ。
3　人間は自分が生きている世界を学び、つくり替えていくことから逃れられないということ。
4　学ばなければならないことが増えると、新たな視点で世界を学ぶ意欲を失うということ。

問四　本文中に③第二段階 とあるが、この「第二段階」で学ぶものの具体例に当たる部分を、本文中から九字で探し、初めの三字を抜き出して書け。

問五　次の［　　］の中は、本文中の④若さ について説明したものである。［A］に入る内容を、本文中から十字で探し、初めの三字を抜き出して書け。また、［B］に入る内容を、二十字以上、二十五字以内で考えて書け。ただし、**新発見** という語句を必ず使うこと。

若者は［A］も多いという点で、若さは弱点であるといえる。一方、若者には［B］力があるという点で、若さは世界を変えていく力であるともいえる。

(2) 次の【資料】は、(1)の【文章】を読んで、脳の研究に興味をもった山下さんが図書館で読んだ本の一部である。脳科学者をめざす人に向けたメッセージが述べられた【資料】を読んで、後の各問に答えよ。

【資料】

Ⅰ

まず、①身体と心を鍛えておくこと。研究は集中力のたまもの。体力がないと集中できませんから。それと若いときに早めに一度挫折を体験すること。そこからもう一度、立ち上がることで強くなります。

研究分野でいえば、脳科学はまだ分からないことだらけです。世界中の脳科学者がこの分からない分野を相手に研究活動を続けています。どうしたらこの②謎に満ちた脳を少しでも理解できるのか。ぜひこの③(　　)踏の分野に飛び込んで研究してほしいですね。

Ⅱ

研究者をめざす人には、いろいろな本を読んだり幅広い経験をしたりして、自分は何に興味があって何が面白いのか、「④好きなこと」を見つけてと言いたいですね。そしてそこだけにとどまらないで、楽しいと思ったことからどんどん世界を広げていってほしいと思います。

(朝日新聞出版 編『いのちの不思議を考えよう③　脳の神秘を探ってみよう　生命科学者21人の特別授業』による。一部改変)

問一　(1)の【文章】の……線を施した部分と同じような状況を言い表している一文を、【資料】から探し、初めの三字を抜き出して書け。

問二　【資料】のⅠに　①身体と心を　とあるが、この連文節における文節どうしの関係と、次の1～4の――線を施した連文節における文節どうしの関係が同じものを、1～4から全て選び、番号を書け。

1　本で調べている。　2　彼は優しくて親切だった。
3　夢や希望がある。　4　意外と簡単なので解けた。

問三　【資料】のⅠの　②謎　の漢字の読みを、平仮名で書け。

問四　【資料】のⅠに　③(　)踏　とあるが、「まだ足をふみ入れたことがないこと」という意味の二字熟語になるように、(　)に当てはまる漢字を、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

1　非　2　無　3　不　4　未

問五　【資料】のⅡの　④好きな　の品詞と、次の1～4の――線を施した語の品詞が同じものを一つ選び、番号を書け。

1　新しいことを始めた。　2　大きな目標を掲げた。
3　急に予定が変わった。　4　考えを簡潔に述べた。

問六　次は、山下さんが行書の学習を生かして毛筆で書いた文字である。アとイの部分に表れている行書の特徴として最も適当なものを、次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号を書け。

1　点画の連続
2　筆順の変化
3　点画の省略
4　点画の変化

二

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

【ここまでのあらすじ】伊豆大島の高校生の「俺」は、陸上部に所属している。4×100メートルリレー、いわゆる四継の第一走者である。八月某日、「俺」はリレーの第四走者だった朝月先輩に、突然グラウンドに呼び出された。制服姿の先輩は、青いリレー用のバトンを持ち、石灰で引かれたスタートラインのところに座って「俺」を待っていた。先輩の提案で、先輩から「俺」へとバトンをつないで走った。

「おまえ、最近、調子どうだ」

「なんすか急に……」

スタートラインまで戻ってきて、乱れた呼吸を整えながら、汗の滲んだワイシャツを第二ボタンまで開けて、並んで天を仰ぐ。質問というより、確認みたいな訊き方をした朝月先輩は「難しいもんだな、渡すってのも」なんてぼやきながら、大していいバトンワークでもなかったわりには清々しく笑っている。

調子どうだ、って言われてもな。俺の走りの話？　それとも……ちらと頭をよぎったのは、この夏、朝月先輩から渚台高校陸上部の部長を引き継いだこと。

うちは男女で特に部が分かれてるわけじゃない。だから、部長は男女ひっくるめて一人だけで、当然男子でも女子でもかまわない。歴代には女子の部長もいたと聞く。そういう意味では酒井でもよかったし、もちろん雨夜でもよかった。だけど朝月先輩は、俺を部長に指名した。それは強制ではなかったけれど、俺は引き受けた。

別に深い意味はない。酒井部長や雨夜部長の下でやっていく自分が、想像できなかったというだけだ。

「別に……普通っすね」

そう答えたら、朝月先輩は顔をしかめた。

「なんだよ、普通って」

「いや……まだ、①実感できるほど時間経ってないですし」

「そっか。ま、そりゃそうだよな」

「っす」

ともに過ごした時間は、一年半とない。特別仲のいい先輩後輩でもなかった。リレーじゃ一走と四走は一番離れている。そんな距離感が、いまだに会話に滲む。いや、でも——手の中のバトンを見つめる。つい今しがた、届くはずのない四走から届いた、青色のバトン。それはひょっとしてそういう……？

顔を上げると、揺れる瞳がそこにあった。

「けど、確かに渡したからな」

朝月先輩が、リレーのときにだけ見せる②不思議な顔がある。100や200では、芯の通った、迷いのない目をしているのに、リレーのときだけはどことなく不安そうな、迷っているような……でもそれは実は、瞳の奥に秘めた強い光に、陽炎のように揺らいで見えるだけなのだ。

なぜ今その目をしているのか、なんとなくわかったから、茶化すことはできなかった。

この人はこの人なりに、俺のことをずっと見てくれていたということなのだろうか。

自分が入部したときにはすでに部長だった。だから、部長としてチームを引っ張ってきた朝月先輩の背中しか俺は知らない。だけど、当たり前だけどこの人にも新入部員だった時代があり、後輩だった時期があるのだなと——そう思うと、不意に手の中のバトンが重みを増したように感じた。

重荷、ということじゃない。

つながなければ、と強く思った。

「……確かに、受け取りました」

絞り出すように答えると、朝月先輩はうなずいて、終わりゆく季節の狭間に吸い込まれるように、静かにグラウンドを去っていった。その真っ白なままのスラックスの尻に、わざわざ着替えてこなかった理由が、やっとわかったような気がする。

ツクツクボウシが鳴いている。大島じゃ、七月から鳴いてるんで気に留めたこともなかったが、本州だと八月の終わり頃に鳴く虫らしい。兄貴が言ってたっけな。

空には少し崩れかけの入道雲。

島を吹き抜ける風には、どことなく秋の気配がある。

夏の終わり。

手の中には、少し汗ばんだ青色のバトン。

そこにあるのは、リレーの道具としてのそれじゃない。かといっ

て伝統とか、責任みたいな、そんな大仰なものでもなくて……上手く言葉にできないけれど、もっとシンプルに、切れることなくここまで届いた——そう、一本の糸みたいなものだ。

その先端を、俺は今、握りしめている。

——オン・ユア・マーク。

頭の中で、声が響いた。

反射的に二度、軽くジャンプしてから、クラウチング・スタートの体勢をとった。

——セット。

腰を上げる。

スタートラインの少し手前をぼんやり見つめる。

③やがて頭の中で鳴り響く号砲が、ここからまた、俺を走らせる。

（天沢夏月『ヨンケイ!!』による。一部改変）

（注）伊豆大島…東京都心から南の海上に位置する伊豆諸島最大の島。
スラックス…ズボンの一種。ここでは、制服のズボンのこと。
100や200…100メートル走や200メートル走。
オン・ユア・マーク…「位置について」の意の号令。
セット…「用意」の意の号令。

問一　本文中に ①実感 とあるが、この場合の「実感」とは、何についてのものか。本文中から二十四字で探し、初めの六字を抜き出して書け。

問二　次の［　］の中は、本文中の ②不思議な顔 について述べたものである。［ア］に入る内容を、五字でまとめて書け。また、［イ］に入る内容を、本文中から十字で探し、そのまま抜き出して書け。

「けど、確かに渡したからな」と言った先輩は、リレーのときと同じ「揺れる瞳」をしている。この瞳は、［ア］という心情の表れに見えるが、陸上部やリレーへの強い思いの表れである「［イ］」によって揺らいで見えているのである。

問三　次の［　］の中は、本文中の表現の工夫について、三田さんと林さんと先生が会話している場面である。

三田さん　「青色のバトン」を「一本の糸みたいなもの」と表現するのは、［A］という表現の技法です。糸が長くつながっている様は、バトンを次の走者へとつなぎ続けていくイメージと共通点があります。

林さん　「一本の糸みたいなもの」という表現によって、先輩から受け取ったものは、途切れてしまわないように扱う必要のある、かけがえのないものだということが伝わります。そのことに気付いた「俺」が、覚悟を決めて先輩に思いを伝えていることが、「［B］」という「俺」の描写から分かります。

三田さん　なるほど。「［B］」という描写にも、「一本の糸みたいなもの」と同じ表現の技法が用いられていますね。

先生　二人とも、描写に着目してよく考えることができましたね。

問四　本文中に ③やがて頭の中で鳴り響く号砲が、ここからまた、俺を走らせる。 とあるが、この一文が読者に印象付ける内容として最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

1　先輩に思いを託されてしまい、今から走り出さなければ許されない「俺」。
2　先輩の思いを受け取ったことで、その思いをつなぐ決意をしている「俺」。
3　先輩のように部の伝統を守ろうと、号砲にせかされ必死で練習する「俺」。
4　先輩に追いつきたいと焦りながら、これから鳴る号砲を待っている「俺」。

(1)［A］に入る語句を書け。

(2)［B］に入る内容を、本文中から十字で探し、そのまま抜き出して書け。

三　次は、『貞観政要』という書物にある話【A】と、その現代語訳【B】である。これらを読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

【A】

貞観十五年、太宗、侍臣に謂ひて曰く、①天下を守ること難きや易きやと。侍中魏徵対へて曰く、甚だ難しと。太宗曰く、賢能に任じ諫諍を受くれば則ち可ならん。何ぞ難しと為すと謂はんと。徵曰く、古よりの帝王を観るに、憂危の間に在るときは、則ち賢に任じ諫を受く。②安楽に至るに及びては、必ず寛怠を懐く。安楽を恃みて寛怠を欲すれば、事を言ふ者、惟だ兢懼せしむ。日に陵し月に替し、以て危亡に至る。聖人の安きにをりて危きを思ふ所以は、正に此が為なり。安くして而も能く懼る。豈に難しと為さざらんやと。

（注）太宗…唐の第二代皇帝。　侍臣…君主のそば近くに仕える者。　侍中…唐代の上級役人。皇帝への忠告を仕事の一つとする。
魏徵…太宗に仕えた侍中。　聖人…知徳がすぐれて物事のすじみちを明らかに心得ている人。

【B】

貞観十五年に、太宗が左右の侍臣たちに、天下を守ることの難易を問うた。侍中の魏徵は、非常に困難であると答えた。それについて太宗は、賢者や能者を信頼して政務に任じさせ、臣下の厳しい忠告を聞きいれればよろしいではないか。どうして困難というのであるかと反問した。魏徵が言うには、古来からの帝王を観察しまするに、国家の憂危の際においては、賢者を任用し、諫めを受けいれます。が、一たび平和になり安楽になりますと、必ず緩み怠る心を持つようになります。君主が安楽な状態に寄りかかって、緩み怠りたいと思っているときには、諫めようとする者も、つい君主の心にさからうのを非常に恐れて忠告しなくさせてしまいます。その結果しだいしだいに悪い状態になり、ついには国家の危亡を招くようになります。昔の聖人が国家の安らかなときにも、いつも危難のときを思って緊張していたのは、まさしくこれがためであります。ですから、安らかでありながら大いに警戒しなければなりません。どうして困難でないと言えましょうやと。

（注）能者…才能のある者。　臣下…君主に仕える者。ここでは、賢者や能者を指す。　諫め…自分より地位などが上の人の欠点や過失を指摘して忠告すること。

（『新釈漢文大系　第95巻　貞観政要（上）』による。一部改変）

問一　【A】の　をりて　を、現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書け。

問二　【A】に　徵曰く　とあるが、この後から始まる発言の終わりを、【A】からそのまま四字で抜き出して書け。

問三　【A】に　①天下を守ること難きや易きや　とあるが、この問いを発している太宗自身の考えとして最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

1　賢者や能者の厳しい忠告を太宗自身が聞きいれないので難しい。
2　賢者や能者を任用することを太宗自身が聞きいれないので難しい。
3　賢者や能者の厳しい忠告を太宗自身が聞きいれれば難しくない。
4　賢者や能者を任用することを太宗自身が聞きいれれば難しくない。

問四　【A】の　②安楽に至るに及びては　という書き下し文になるように、解答欄の漢文の適当な箇所に、返り点を付けよ。

問五　次の□の中は、【A】と【B】を読んだ平田さんと中村さんと先生が、会話をしている場面である。

平田さん　【A】で魏徵は、太宗の問いに対して「甚だ難し」と答え、その理由を説明するときに、対照的な人物を挙げています。

中村さん　そうですね。【A】では、初めに「ア」を挙げ、安泰だった国が「危亡に至る」様子を分かりやすく順に説明しています。次に「聖人」を挙げて、国の安泰を保つための心構えを示しています。

平田さん　【A】には、「安楽」のときに生じる「イ」によって、臣下が君主の心にさからうのを恐れて忠告しなくなる状況が引き起こされるとあります。その結果、国が「危亡に至る」というわけですね。

中村さん　【A】で、「ア」も「ウ」のときには「危亡に至る」ことのないように行動しています。一方、「聖人」は、「ウ」のときだけでなく、常に「危亡に至る」ことのないように「エ」ということを意識して行動していたと魏徵は考えています。だから、魏徵は太宗の問いに対して「甚だ難し」と答えたのですね。

先生　二人とも、登場人物の言動の意味に着目して【A】の内容を考えることができましたね。

(1)　ア　に入る語句として最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書け。

1　太宗　　2　侍中　　3　賢能　　4　古よりの帝王

(2)　イ　、ウ　に入る語句を、【A】からそれぞれ漢字二字で探し、そのまま抜き出して書け。

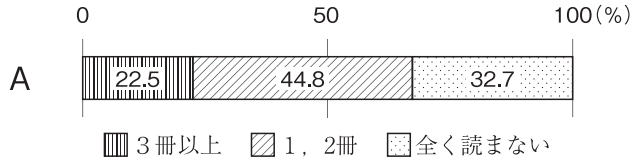
(3)　エ　に入る内容を、十字以上、十五字以内でまとめて書け。

四　F中学校の各学級では、図書委員会の提案を受け、次の【資料】を基に、読書量を増やす取り組みについて考えることになった。あなたなら、どのように考えるか。【資料】を読んで、後の条件1から条件5に従い、作文せよ。

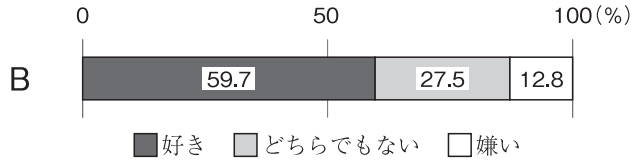
【資料】

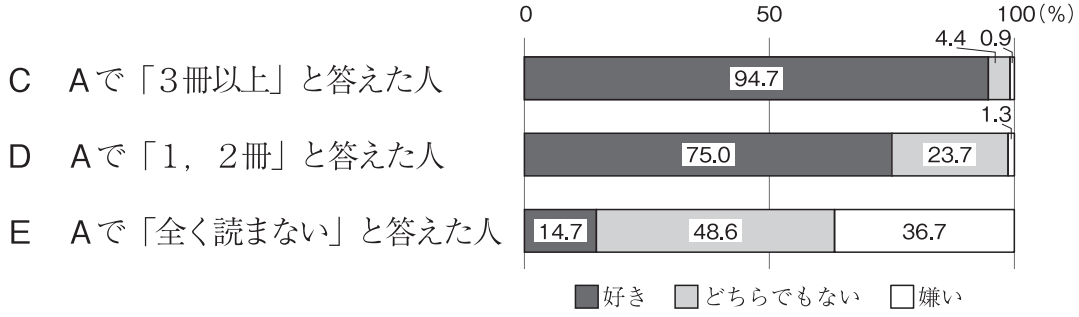
※雑誌などを除く「本」全般を対象とする。
※紙・電子全て含める。

月に本を何冊程度，読みますか。



読書は好きですか。





（「18歳意識調査『第30回 －読む・書く－』詳細版」（日本財団　2020年10月30日）を基に作成）

条件1　文章は、二段落構成とし、十行以上、十二行以内で書くこと。

条件2　第一段落には、【資料】のAのグラフと、B～Eのうちいずれかのグラフ（どれをいくつ選んでもかまわない。）から分かることを挙げ、それについてあなたが考えたことを書くこと。なお、グラフはA～Eの記号で示すこと。

条件3　第二段落には、第一段落を踏まえ、読書量を増やす取り組みとしてあなたが考えた案を一つ挙げ、その案を挙げた理由を自分の知識や経験と結び付けて書くこと。

条件4　題名と氏名は書かず、原稿用紙の正しい使い方に従って書くこと。

条件5　グラフの数値を原稿用紙に書く場合は、左の例にならうこと。

例

5	・	7
%		

39	・	1
%		